橫光利一文学における「皮膚」作品群の成立をめぐって

文藻外語大学日文系助理教授　謝　惠貞　　800字

The series of“Hifu(皮膚)” in Yokomitsu Riichi’s Works

1920～30年代、東アジアにおいて、日本のモダニズム文学は広く受容されていた。特に、横光利一を中心とした日中や日韓の間の受容研究は、一程の蓄積がある。それらの共通点として、中国の劉吶鴎や韓国の李箱などの代表的な受容者が、主に横光利一の「恋愛もの」を受容した点があげられる。申請者は、かつて劉が横光の「皮膚」の模作として中国語作品「遊戯」を戦略的に執筆し、創作集『都市風景線』を出版し、中国新感覚派を立ち上げたことを論証した。

　一方で、「皮膚」という重要な作品は、日本ではあまり研究されてこなかった。横光の作品を年譜で見ると、「春は馬車に乗つて」（『女性』1926.8）から長編『上海』（「風呂と銀行」『改造』1928.11）と、新心理主義の「機械」（『改造』1930.9）と「純粋小説論」の一連の実践「天使」（1930.2～7）「花花」（1931.4～12）へ至るまでの間には、ブランクがある。ところが、この時期に発表された随筆「銀座について」（『読売新聞』1927.3.16）では、新しい芸術創作への意欲を吐露している。「光つた機械とでも云ふべき新鮮な無表情」や「生殖そのもの」を「美しい硝子のやうに」取り扱う芸術を「文化の先端」と称している。その論述は「皮膚」に最も強く現れている。ゆえに、この1927年～28年の間には、一連の作品を「皮膚」と共に実践作品群として見なす可能性が浮かび上がってくる。

小論は、小里文子との実体験に基づく「計算した女」（『新潮』1927.1）をはじめ、「火が点いた煙草」（『婦人公論』1927.4）、「朦朧とした風」（『改造』1927.7）「七階の運動」（『文藝春秋』1927.9）、「皮膚」（『改造』1927.11）などの作品の交差的に比較し、横光利一における「皮膚」作品群の成立の可能性を論証したい。